「現代文学」誌上の日野啓三

山内祥史

I　「現代文学」創刊号まで

日野啓三や大岡信による同人雑誌の発行計画は、一九四九（昭和二四）年の頃、官立第一高等学校の明寮三階読書室で進められたようだ。当時この部屋には、一九四九（昭和二四）年に文科甲類を卒業した日野啓三と一九五〇（昭和二五）年に文科丙類を卒業する大岡信とが同居していた。大岡信『『向陵時報』終刊のころ』（「向陵」第四一巻第二号、一九九九年一〇月三日付発行）に、次のような言説がある。

私が時報委員になる前の前任時報委員は日野啓三だった。（略）彼は私の一級上の文甲の生徒で、明寮三階読書室に一人で住んでいた。他の部屋は六、七人ずついたのにこの部屋だけが居住者一名というのは、ここが入口階段を三階まで上がったとっかかりの、たぶん以前は荷物などの置き場だったかもしれない小部屋だったからで、私も委員に就任した時この部屋に引越した。日野は東大社会学科に入ったが、適当な下宿がなく、半年間くらい私の部屋に同居していた。私たちはここで、新たに数人の友人と共に同人雑誌を出す計画を進めたりしていた。住むべき下宿もきわめて乏しい時代だった。彼の同居は当然学校には無届けだった。

私たちの同人雑誌計画は一年ばかりして実現した。誌名は『現代文学』で、五号まで出した。それは私が東大へ進んだあとだった

「時報委員」というのは、日野啓三によれば「「向陵時報」編集委員兼文芸部委員」であった。「台風の眼」には、次のような言説もある。

文芸部委員はかつて文芸部雑誌を出すのが仕事だったのだが、経済的に独立の雑誌を出せなくて「向陵時報」新聞の一部に投稿の短篇小説を掲載する、という便宜的な事情から兼任ということになったに過ぎない。

中村稔も『向陵誌　駒場編』（一高同窓会、一九八三年一二月一日付発行）の「文芸部」欄で「明寮三階の読書室を文芸部の部室として、ここで」日野啓三や大岡信が「それぞれ文芸部委員として生活していたことに間違いない」と回想している。

日野啓三が第百七十五期寄宿寮委員の「時報委員」に就任したの

は、一九四八（昭和二三）年九月一〇日で、大岡信が第百七十六期の寄宿寮委員の「時報委員」に就任したのは、一九四八（昭和二三）年の一二月三日であったようだ。日野啓三「年譜」の「一九四九（昭和二四年）」の項に、東大に進んだ後「三鷹市大沢の父の知人宅に下宿、まだ雑木林の多かった武蔵野を歩きまわってドストエフスキーを読み耽った」とある。大岡信が「時報委員」に就任した一九四八（昭和二三）年一二月三日から、日野啓三が父の学生時代の友人宅「三鷹市大沢一、三八七」に下宿するまでの頃、明寮三階読書室で、ふたりは「新たに数人の友人と共に同人雑誌を出す計画を進めた」というのだ。日野啓三「大岡信の思い出」（「ユリイカ」第八巻第一四号、一九七六年一二月一日付発行）によれば「旧制一高の寄宿寮の、文芸部委員室（向陵時報編集室）に彼と半年ほどふたりで起居した」とあるから、それは、一九四八年一二月から一九四九年五，六月頃までの事であったのだろう。日野啓三によれば、「数人の友人」とは、「一高時代の同級生」文科甲類の山本思外里（しげり）、「一年後輩」の大岡信と同じ文科丙類の丸山一郎、稲葉三千男らで、「同人雑誌」とは、彼が大学「二年になって」出した「原稿を綴じただけの回覧同人誌」「二十代」と、「三年に進んでから」出した、ガリ版刷りの同人誌「現代文学」とを指すようだ。日野啓三は「結局、回覧誌を五冊、ガリ版誌を五号の計十号を出したのだから、学生の同人誌としては結構続いた方だろう」という。

「二十代」は、一九五〇（昭和二五）年六月に創刊号が発行された。巻頭「評論」欄の日野啓三「若き日のドストエフスキイ―人道主義という自己欺瞞―」の他、「詩」欄の大岡信「極み」「海について」の二篇と、「創作」欄の丸山一郎「色彩狂詩曲（四二枚）」、山本思外里「夏の人（五二枚）」、稲葉三千里「影芝居（五六枚）」の三篇とが見られる。日野啓三によれば「若き日のドストエフスキイ」は、彼の「初めて文学にかかわる文章」であったという。執筆当時「ラスコーリニコフの如く貧しかったが、赤門前の喫茶店で、同人たちと毎日ダベるのは楽しかった」と回想している。佐野洋（丸山一郎）の「靄を持った男」（「ユリイカ」第八巻第一四号、一九七六年一二月一日付発行）によれば「私たちは、同人雑誌を発行する前、回覧雑誌をやっていた。原稿を持ち寄り、製本した上で、回覧するという形式なのだが、その末尾十数ページは、白紙が綴じこまれ、そこに互いの批評を書くことになっていた。」という。一九五〇（昭和二五）年八月発行の「二十代」第三号には、大岡信の「日野君に」と題する作品評がみられる。「末尾」に「綴じこまれ」た「白紙」に書かれた「批評」であろう。「日野君に」に依れば、日野啓三は、「二十代」に、「評論」と「ドラマ」と「小説」とを発表したようだ。大岡信の評言を、要約して示しておこう。

「評論」については、「足踏みを痛ましく思う」と評している。「書かなくてもよいものを書かねばならない所」に「足踏み」がある。「書くべきこと」は、「如何に賭けるか」である。「君は、賭けた人と賭けることに失望した人」とを書いている。「このような方向の評論」には、「裁断し、進んで原理を明示する」という「賭け」が必要だろう。「君の評論」は「賭けた人を描いて遂に賭けはしなかった」と指摘している。

「ドラマ」については、「日野啓三」とか「観客」とかが登場する

が、その「必然性がない」と指摘している。「みどりの背が微かにふるえる」といった下書きが目につくが、「読むドラマとしても」後半は蛇足で、前半だけでいい。「このような野心は」もっと「堂々たる論拠の下に企てられるべき」だと評している。

「小説」については、(一)は「都会趣味」を以て書かれていて「饒舌」が目立つ。「僕」は(二)の後半から(三)を愛する。(三)は「私小説的」な「君の人柄が直に迫ってくる」よさがある。全体的に作品の「言葉の脆さ」が気になる。特に(一)では「贅肉が多すぎる。」「言葉の抑制による力の噴出」を心掛けて欲しい。

以上大岡信「日野君に」の作品評のうち、「評論」は、「若き日のドストエフスキイ」で、「賭けた人と賭けることに失望した人」とは、若き日のドストエフスキイのことかとも思われる。しかし、「ドラマ」と「小説」とは、標題さえも不明である。内容が明らかにされる日を待ちたい。ともあれ、これら大岡信の評言は、日野啓三に良き評言と感じられ、自省の材として活用されたと判断される。佐野洋（丸山一郎）の「靄を持った男」には、次のような言説がある。

その回覧雑誌は、いまも、日野啓三のところに二冊、私のもとに一冊という形で残っているが、日野は、あるとき、それを引っぱり出して読み返し、大岡とは恐るべき奴だと思ったという。

日野啓三は、戦闘的な文芸評論で文壇に登場し、やがて自ら実験的な小説を書き、つぎに、私小説的な作品によって、芥川賞を受賞した。だから、日野啓三は年令とともに変った――という評価をされているらしいが、大岡は、二十数年前に、すでに、今日の日野を予見した文章を、その『相互批評欄』に書いているのだそうだ。

「私小説的な作品にこそ、日野の才能は開花するのではないか、と言った意味なんだが、とにかく、あいつの鑑賞眼は、大したものだよ」

日野は、電話で、そんなことを言った。

「二十代」の仲間は、同じ高校の文科出身者だけであった。大岡信によれば、「高等学校は違ったが東大で私たちと一緒になった」という金子鉄麿（かねまろ）を加えて、「現代文学」が発行されたのは、一九五一（昭和二六）年三月のことであった。大岡信「大きな肯定への意志」（「朝日新聞（夕刊）」第四一八六九号、二〇〇二年一〇月一八日付発行）によれば、「現代文学」は「日野を中核に置いた」同人雑誌だったといい、日野啓三の回想によれば「大岡が詩を、丸山が小説を、私が思想的傾向の強い文芸評論を書く」とある。創刊号の「目次」を掲げると、次のようであった。

評論　第二の創世期―ニヒリズム文学の系譜　日野　啓三　1
詩と夜の旅　大岡　信　17
表現主義運動の問題性　金子　鉄麿　22
詩　《パブロ・ピカソに》他　エリュアール　35
詩抄　大岡　信　38
創作　防響室　丸山　一郎　43
病めるハイランド　山本思外里　57

創刊時の「現代文学」同人は、「イロハ順」で、大岡信、和田誠一、金子鉄麿、山本思外里、丸山一郎、日野啓三の六名であった。和田

誠一は、大岡信と同期の一高文科丙類卒で東大法学部に在籍。他の五名は「東大文学部」在籍の学生であった。

日野啓三「第二の創世期」は、「十九世紀のロシヤ知識人たちのおかれた」現実と「民衆」の「沈黙」とから説き起こしている。「二十代」創刊号に発表の「若き日のドストエフスキイ」を継いだ稿であったのだろう。日野啓三「台風の眼」での回想に「ドストエフスキーから、アルツイバーシェフら世紀末の虚無主義作家、革命直後の同伴者文学に至るロシアの雑階級知識人たち（つまり新しい都市中間層）の文学と生き方を踏まえて、現代の自分の生き方を手探りするエッセイ的評論を書く。」とある言説は、この「第二の創世期」を指すのであろうか。創刊号の現物を手にする事が叶わなかったため、内容を確認する事ができない。

Ⅱ　「現代文学」第二号

「現代文学」第二号の目次を示すと、次のようである。

評論　現代文学とは何か　日野　啓三　2
詩　詩二篇　大岡　信　14
戯曲　颱風の来る日（一幕）　金子　鉄麿　19
特集　現代文学の問題　27
　政治と文学　宗教と文学　科学と文学
　歴史と文学　生活と文学
書評　クラウス・マン『インテリは生きられない』　犬田　れい子　38
小説　邂逅　山本思外里　44
　漂流　和田　誠一　58
　二相系　丸山　一郎　69

「現代文学」第二号は、一九五一（昭和二六）年七月一日付で発行された。編集発行人日野啓三。発行所「現代文学」編集部　東京都大田区市野倉町丸山一郎方。印刷所　南雲堂　東京都千代田区神田猿楽町一ノ五であった。「現代文学同人」は七名。二号から「新しく同人となった」犬田れい子は、「東大文学部」の学生であった。

巻頭に日野啓三の評論「現代文学とは何か」が掲げられている。その文末には「（一九五一・六・一四）」とあって、二十二歳の誕生日の脱稿と知れよう。当時の彼の「現代文学」についての思考が如実に示された評論である。この「評論」が、識者の注目を受け、「新人批評家」として認められたのであった。日野啓三の「思考の出発点」となった「重要な評論」である。その要旨については、次のⅢで、加藤周一「新しい批評家」に紹介された、要約によって示すことにしよう。日野啓三作製の「年譜」によれば、「昭和二十六（一九五一）二十二歳」の項に、次のような言説がある。

ガリ版刷りの同人誌「現代文学」を出す（5号まで）。「ニヒリズム文学の系譜」「現代文学とは何か」などの評論を書く。／荒氏のすすめで「近代文学」に「野間宏論」「エレンブルグ論—ひとつの伝説について」「堀田善衛論」などを書く。／これらの評論（いずれも単行本未収録）とくに「現代文学とは何か」で、新人批評家として認められる。

一九五一（昭和二六）年八月一日付発行の「近代文学」第六巻第

五号「第五十号記念」の「戦後作家論」欄には、日野啓三「野間宏論」と丸山一郎「加藤周一論」が、「Books」欄には丸山一郎の「椎名麟三著『赤い孤独者』」が、一九五一（昭和二六）年九月一日付発行の「近代文学」第六巻第六号の「現代外国作家論」欄には、日野啓三「イリヤ・エレンブルグ論―ひとつの伝説について―」と山本思外里「フアジェーエフ論」が、一九五一（昭和二六）年一二月一日付発行の「近代文学」第五巻第八号には、「現代日本作家論」欄に日野啓三「堀田善衛論（颱風の眼ということ）」と「Books」欄に山本思外里「ババイエフスキイ著『金の星の騎士』岩上順一訳」などが見られ、「現代文学」同人の活躍が目に立つ。別の「年譜」で日野啓三は、次のようにも追想している。

二号に掲載した「現代文学とは何か」および同じ頃雑誌「近代文学」に書いた「イリヤ・エレンブルグ論―ひとつの伝説について」は、古典的なヒューマニズムと政治的な変革運動の双方に反対しながら、現状傍観的でない人間的な場はいかにして可能か、という二者択一を超える地点を探り当てようとして、その後の思考の出発点となった重要な評論。

「反現実的現実主義」ともいうべき「立場なき立場」が、その後「〝虚点〟という言葉に結晶」したという。

なお、日野啓三の「現代文学とは何か」が発表された後、一九五一（昭和二六）年九月一日付発行の「文学界」第六巻第九号に、小林秀雄と大岡昇平との対談「現代文学とは何か」が掲載されている。或いは「文学界」編輯者が日野啓三の論題に示唆されての企画であったかもしれない。

却説、「現代文学」第二号の「特集　現代文学の問題」欄の「政治と文学」も、末尾に「（H）」とあるから、日野啓三の手になる稿と判断される。ここでも、「現代文学とは何か」と同様に、「現代に文学の成り立つためには、政治の非人間性に抵抗するという形で自己の人間的リアリテイを文学的リアリテイにまで高めうる文学という答えをうるために、政治と文学の否定的相関という関係仕方を考えねばならない」と提言し、「現代」に「文学」を「成立」させるため、「新しい文学を新しい政治と文学の相関図式の設定によって考えねばならない」と主張している。

これら「政治と文学」の問題は、一九五一（昭和二六）年三月一日付発行の「近代文学」第六巻第三号所掲の埴谷雄高、花田清輝、日高六郎、安部公房、堀田善衛、野間宏、平田次三郎、佐々木基一、荒正人等による「座談会　政治と文学」から示唆を得ての成稿であったのだろう。

また、「現代文学」第二号の「編集後記」には「（日野）」の署名があって、一九五〇（昭和二五）年に始まった朝鮮戦争についての、次のような言説が見られる。

朝鮮に於いて、人は既に軍人であるか、避難民であるか、その二つの仕方でしか存在しえない――とある朝鮮人の新聞記者がかいていた。彼処に広漠の赤土を更に赤く染めることの崇高さについて、ぼくらは多く耳を傾けてもきたし、ジュラルミン製の人殺し道具の人間実験について、その愚劣さをぼくらは繰返し語ってもきた。しかし、そうした花やかな悲喜劇は唯、物言わず黒々と赤い赤土の涯を流浪（ながす）れ続ける避難民の群という背

景を前にしてはじめて成り立っていることをぼくらは忘れたくない。歴史の被害者たち――そして被害者だけが正しく歴史の背景であったし、之からもそうであることを知っている―彼等こそ「私がいつも味方になろうと思ってきた人達」（ペスト）であり、ぼくら自身も亦被害者ではないと誰が保証しよう。

ダレス氏の摘み残したスミレが、最初に踏みにじられてから早一年目の日を間近く、毎夜慣れぬ編集の朱筆をとりながら、ぼくはそれら黒い人群の言葉なき抗議の声を、夜の彼方にそして自らの中に強く聴くように思えた。彼等無数の味方の人達のために、従って自分自身のために――このさゝやかな仕事はありえていゝし又なければならぬと、ぼくの信ずるひとつの理由でもあろうか。

とにかく、こゝに第二号を発行しえたことをひそかに喜びたいと思う。

幼少時を「朝鮮」で過ごし、敗戦後「一週間余の死物狂ひの旅の後」引揚げ船で帰国した日野啓三にとって、朝鮮戦争での「避難民」の苛酷な体験には、身につまされる想いを抱かざるをえなかったにちがいない。

Ⅲ　「現代文学」第三号

「現代文学」第三号の「目次」を示すと、次のようである。

評論　菱山修三論　大岡　信　37
小説　サングラス　山本思外里　83
『対立』　丸山　一郎　63
随想　如何に生くべきか　日野　啓三　58
桂離宮―お伽の国文化について　犬田れい子　33
詩　挽歌　大岡　信　31
戯曲　寒冷前線（三幕）　かねこ・かねまろ　1

「現代文学」第三号は、一九五一（昭和二六）年一一月二〇日付で発行されている。編集兼発行人大岡信。発行所は、第二号と同じ。印刷所　共栄社　東京都杉並区高円寺一ノ一〇。同人氏名の記載はないが、大岡信「編集後記」に「百三十部印刷、九千六百円（内五割強を同人六名で負担）」とあるから、第三号発行時の同人は寄稿者の六名であったのだろう。

却説、天野貞祐に、『如何に生くべきか』（雲井書店、一九四九年六月二五日付発行）という著書がある。谷川徹三、眞下信一、新島繁との対談をも含んだ書だ。天野貞祐は、一九四六（昭和二一）年二月九日一高校長に就任し、一九四八（昭和二三）年二月七日に辞職。一九五〇（昭和二五）年三月六日第二次吉田茂内閣の文部大臣に就任している。日野啓三が一高に入学した当時の一高校長で、一九五一（昭和二六）年一一月当時、文相の職にあった。また、眞下信一は、日野啓三が一高の弁論部に入室した時、担当教官であった。この天野貞祐の書と同題の随想を書き、

如何に生くべきか、といった問いは既に平和な時代の遺物でなければ、現代では極く少数の恵まれた特権である。特権ある人は精々失わぬ間にそれを利用するがいゝ。

と批判している事は注目されるべきであろう。

日野啓三は、「如何に生くべきか」において、ドストエフスキイの「現代の特殊性の研究報告」である『作家の日記』の矛盾と背反に注目し、「目的の絶対を説くコミュニズムと手段の純粋に固執せざるをえないヒューマニズム」という現代の背理を背理のままに生きるべきで「如何に生くべきか」といった問いが無意味である、という意味。これが現代にも文学が成立しうる根拠だと説いた。「二十代」第三号で、大岡信に指摘された、「賭け」を実践した随想であったといえよう。

巻末の大岡信「編集後記」には、「朝鮮の風土にすでに再び冬が迫つた」という言説や「我我の文学は荒地から立上る」という言説がある。第二号の日野啓三「編集後記」を受け継いだのであろう。更にその後、次のような言説がある。

日野の評論「現代文学とは何か？」（第二号所載）が加藤周一氏によつてとりあげられ、非常な期待と激励とを受けた。（文学界十二月号）。色々の人々の注目を既に受けたものであり、加藤氏によつてこゝに大きくとりあげられることにより、彼の所論が新たに検討されるべき機会をもつたことを喜ぶものである。それにつけても、本号に日野のまとまつた評論を得ることができなかつたのを残念に思う。「近代文学」十二月号に彼の堀田善衛論が掲載される筈である。「現代文学とは何か？」で展開した論旨の一つの結晶である。ついで見られんことを。

大岡信によって紹介されているのは、一九五一（昭和二六）年一二月一日付発行の「文学界」第五巻第一二号の「特集・一九五一年の文学活動」の「新人」欄に掲げられた、加藤周一「新しい批評家」である。「一九五一年の同人雑誌には、新しい批評家が活動した」として、「来るべき年に」活動が「期待」される批評家として、日野啓三、濱田新一、中村稔、平井啓之の四人を挙げ、日野啓三の「仕事」を第一に紹介している。少し長くなるが、「現代文学とは何か」の内容紹介も兼ねて、次に日野啓三紹介部分の言説を掲げておこう。

日野啓三は「現代文学とは何か」（「現代文学」第二号）を論じ、現代が「政治的季節」であるにも拘らずなぜ文学が必要とされるかという理由をやゝ抽象的に、しかしはつきりと説明した。彼の説明はこうである、「政治とは、目的のためにはいかなる手段も亦やむを得ず、という原理の上にのみ成り立つものである。」一方、従来のヒューマニズムは、手段に固執して目的を拒絶し、現状を容認するものである。ところが、今では、「目的のために手段をえらんでいられる余裕ある幸福な時代は終つた。」ヒューマニズムはもはや政治の「目的」に対して、「手段」をえらぶことができないから、目的と手段とを同時にえらび、目的と手段との矛盾のなかで自己を分裂させる他にない。現代文学とは、その分裂の自覚的な表現であるという。別なことばでいうと、「いづれか一方に立ち、己の立場のみを絶対とすることによつて他を否定することをしないというすぐれて主体的な決意」が現代文学の根據だということになる。日野はそこでカミユやドストエフスキーや椎名麟三を論じたが、それぞれの論じ方には問題があるとしても、彼自身が文学をどう考えているかというあらすじははつきりと示されている。そういう考え方が実存主義的であるかどうか、そんなことはどつちでも

よい。とにかくそういう考え方が強い現実感をもつて強調されていること、或は強調されざるをえないということ、しかしそういう考え方から具体的な行為の指針をひきだすのはむづかしいだろうということは、注意されてしかるべきだろう。日野はむづかしいところに乗りだしている。それは、ある意味では、現代がむづかしい時代だからである。彼が彼の考え方を具体的な場合に応じてどう展開してゆくかはみものだ。文学は時代の現実にどこかで深く触れなければならない。日野はわたくしの読んだかぎりでは必ずしも綿密な論理家ではないが、文学者としての現実感覚は具えているように思われる。

Ⅳ　「現代文学」第四号

「現代文学」第四号の「目次」を示すと、次のようである。

詩　1951降誕祭前後　大岡　信　2
評論　現代の《人間の條件》　日野　啓三　41
創作　防響室　丸山　一郎　6
　裸の年　山本思外里　91
　〔戯曲〕出雲の人々　金子　鉄麿　54
随想　Refraction　中江　利忠　105

「現代文学」第四号は、一九五二（昭和二七）年五月一日に発行されている。編集兼発行人　「現代文学」同人会。編集部は、第二号第三号の発行所と同じ。印刷所は世田谷区北沢一ノ一、二七八八重垣書房。同人氏名の記載はないが、新しい寄稿者として中江利忠の名が見られる。大岡信「『向陵時報』終刊号のころ」によれば、「中江利忠も、ほとんど文学作品は書かなかったが同人に加わっていた。中江は私と同期の文乙出身で、私が時報委員の時、彼は庶務委員だった。」とある。

日野啓三の「現代の《人間の條件》」は、小林秀雄と正宗白鳥との思想と実生活論争での小林秀雄の次の見解を紹介する事から説き起こし、次のように述べている。

> 思想が正しく人間の思想であるためには、実生活からこそ出発せねばならぬ、そしていつかは再び実生活の上に還帰するのがよいのだ――思想自身にとっても、又実生活にとっても。

同様のことが「自己を語るべきか」「世界について記述すべきか」の問題にも妥当するとして、「まず己れをみ、己れの周囲を眺め」、「漸次視野」を「世界の涯てまで拡大」し、「彼処極北の認識」に耐え「そこ不毛の砂漠の思索」を経て、再び「自らの周囲に己れ自身」に「何物かを持ちかえらねばならない」という「信念」を述べている。この「信念」に基づき「思索の歴史」を展開。彼は彼自身の「自由・希望・幸福を推論」し「他人との愛」について論じ、「推論は再び出発点に戻」っている。「ぼくらに必要とされること」は、「ぼくらがぼくらの眼でぼくら自身の周囲をみまわ」し、「そこで明らかにみたことをぼくらの能力に応じて確実に実行にうつすこと」で「一切はそこから始る」と。一三頁に亙る力篇評論で、日野啓三の文業の核心となる基本姿勢が形成された、重要な評論であったといってよかろう。

却説、第四号には「会員募集」の、次のような広告が掲げられて

いる。

「現代文学」では、このたび、雑誌の発行を確実にし、内容を充実するため、さらに多くの方々と、歩みを共にしたいと思い、組織の拡大を計ることになりました。

志を同じくする方々が、会員として御参加下さることを望みます。

第四号の「編集後記」末尾にも、次のような言説がある。

ぼくらのさゝやかな試みも、第二年に入つた。

今まで、種々の都合で、発行日も不定であつたが、今後、季刊の形で年四回は必ず出したいと思つている。(次号は、七月下旬発行の予定)

そしてこの機会に、歩みを力強く確固たるものにするためにも、さらに多くの諸君の参加を望みたいと思い、会員を募つている。志を同じくする方々は御連絡のほどを。

署名は(M)。丸山一郎の手に成るものであろう。

V 「現代文学」第五号

「現代文学」第五号の目次を示すと、次のようである。

詩　神話は今日の中にしかない　大岡　信　2
創作　ママパパ物語　稲葉三千男　8
　括猿　賀外山　一　46
詩　おとづれに　金　太中　29
評論　「真空地帯」と反戦文学　中江　利忠　32

“U・S・A”について

天野　三郎　39

「現代文学」第五号は、一九五二(昭和二七)年七月一日付で発行されている。編集発行人「金子鉄麿」。発行所は「現代文学」編集部。住所は、第二号第三号の発行所、第四号の編集部と同じ。印刷所は第四号と同じであった。

第四号での「会員募集」の効果があったのだろう。第五号に掲げられている「現代文学同人」は、これまでの「犬田れい子　大岡信　金子鉄麿　山本思外里　丸山一郎　日野啓三　中江利忠」の七名に、新しく「賀外山一　高橋栄　天野三郎　稲葉三千男　金太中　高橋栄雄　中山泰三」の七名が加わっている。このうち、稲葉三千男は「二十代」同人で、金太中は大岡信と同期の特設高等科文科の、中山(濱田)泰三は日野啓三と同期の文科丙類の卒業であった。

第五号には、日野啓三の稿は見られない。一九五二(昭和二七)年に大学を卒業し読売新聞の本社外報部に勤務するようになって、身辺多忙になったためかもしれない。或いは、「台風の眼」に、「近代文学」から「原稿の注文を受け」て「イリヤ・エレンブルグ論」を寄稿した折の想い出を、「自分たちの同人誌の不鮮明なガリ版文字とちがって、自分の書くものが本ものの活字に印刷される初めての経験。」と記しているが、この辺の事情も関連しているかも知れない。前年に引き続き、日野啓三は、一九五二(昭和二七)には、二月一日付発行の「近代文学」第七巻第二号の「Books」欄に「ジャン・ゲノー著内山敏訳編『深夜の日記』」を、七月一日付発行の「近代文学」第七巻第七号の「Books」欄に「李広田作岡崎俊天訳『引力』」を、九月一日付発行の「近代文学」第七巻第九号の「Books」欄に

「除村吉太郎訳『ソヴイエト文学史』Ⅰ・Ⅱ」をと書評を掲げ、一二月一日付発行の「文学界」第六巻第一二号の「新人評論特輯」欄には、文芸評論家として真のデビュー作となる「虚点という地点―荒正人論―」を発表しているから、ガリ版同人誌「現代文学」からは、心が離れつつあったのでもあろう。

「現代文学」は、「歩みを力強く確固たるものにする」ために「組織の拡大を計」ったが、結果は日野啓三などの寄稿もえられなくなって、この第五号で終刊した。日野啓三にとっては、大岡信に指摘された「賭け」を実践し、文学的力量を大きく伸展させた、貴重な同人雑誌であったといえよう。

〔付記〕

（1）誌名と引用文中の旧漢字は、印刷の都合を考え、新漢字に改めた。

（2）この稿を草するに際し、ふくやま文学館小川由美氏の助力を戴いた。記して謝意を表する。なお、二〇〇六年六月一〇日付で個人誌「日野啓三研究」第一号を発行された相馬庸郎氏は、二〇〇九年八月五日付で第七号（その二）を、二〇〇九年九月一五日付で第八号を発行された。日野啓三の文業についての相馬庸郎氏の真摯な論究に刺戟され、またついこのような拙稿を草する仕儀となった。相馬庸郎氏にも、敬意と謝意とを表しておきたい。

（やまのうち　しょうじ）